

第3回 「社会調査を活用するには」

佐藤寛（アジア経済研究所）

I. 本講義の流れ

- ①はじめに：社会開発と貧困削減と社会調査
- ②なぜ「社会調査」を行うのか
- ③何を「社会調査」で把握するのか（以上第1回：9月15日）
- ④どうやって「社会調査」を実施するのか（第2回：9月22日）
- ⑤どうやってプロジェクトに反映させるのか（第3回：本日）

II. 本日の内容（午後7時～8時30分）※終了後・希望者による懇親会

4. どうやってプロジェクトに反映させるのか

～調査結果のプロジェクト・デザインへのフィードバック～

開発プロジェクトのための社会調査の定義・確認

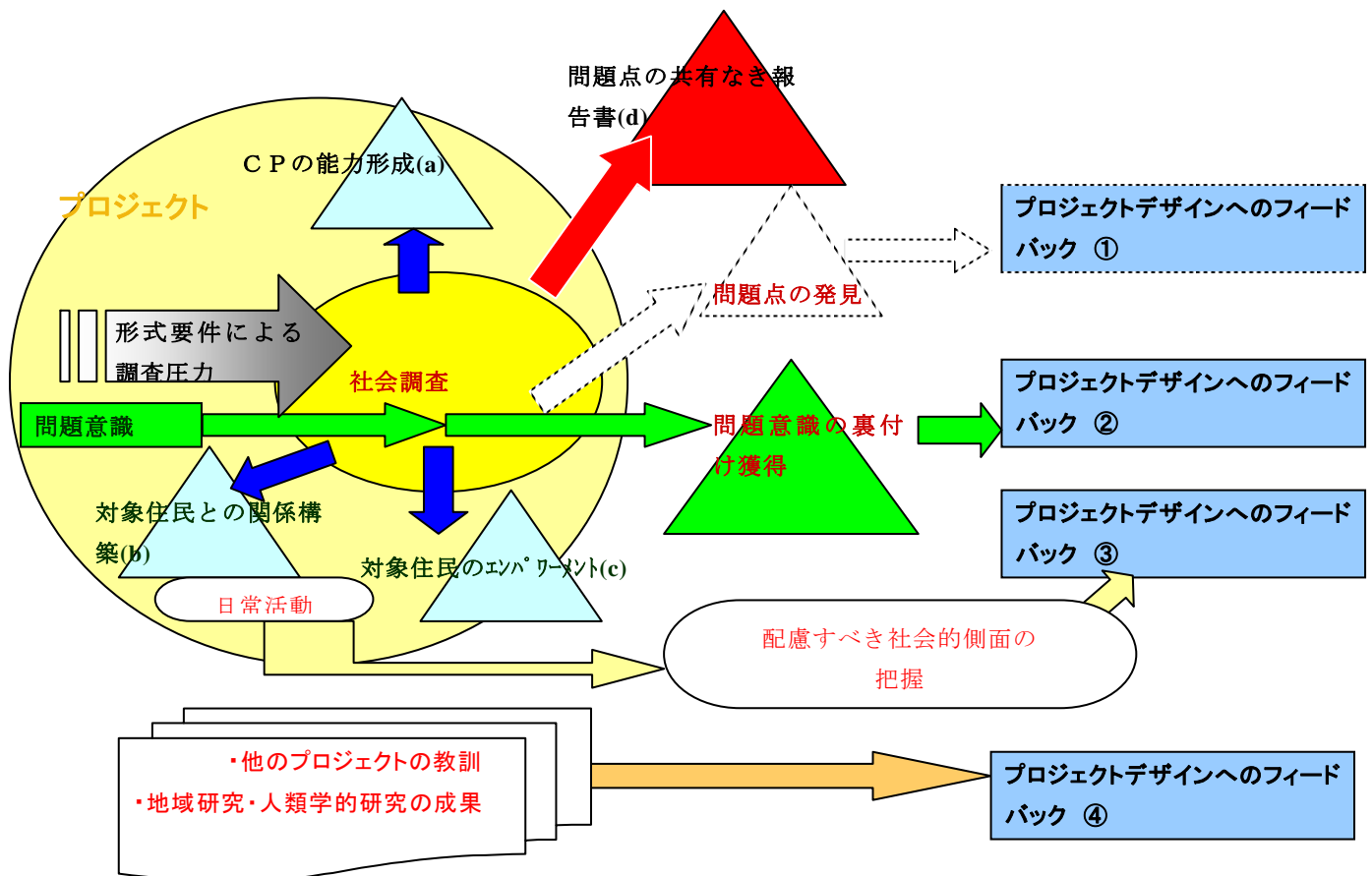
「開発プロジェクトのデザインを形成・変更するにあたり、その根拠を得るために
行われる、対象社会の状況に関する、情報収集・分析・提示作業」

=フィードバック・活用されなければ意味がない。

1) 現状認識 フィードバック率が低い

JICAの自己調査～過去10年ほどの案件→フィードバック率が低いという認識

【活用・非活用のルート】



(出典・JICA「社会調査の事業活用研究会報告書」)

社会調査の副産物（特に参加型調査）の意味は大きい。ただし、フィードバックには直接関わらない。

日常的なモニタリングが最もフィードバック率の高い社会調査である。

2) 報告書で勝負しよう

調査の質より報告書の書き方

● 執筆の手順

- ① 集めた情報を書き写す前に＝仮説の再検証
自分なりの「評価」を固める
- ② 提言（メッセージ）を固める
調査の目的は
 - a) プロジェクトデザイン通りの成果を出すために
 - b) 意図せざる被害者が出ないように
- ③ メッセージに向けて、データを配列する
 1. 発見した事実を洗い出す
 2. 当初の仮説のからの逸脱を拾い出す
 3. 逸脱の原因と対処方法について考える
 4. コメントと提言を考える（ロジカルな対応＋現実的な対応→提言）
 5. 聞き入れてもらえるための加工をする

● 報告書は第1ページが9割

● 誉めてから問題点を指摘する

● 技術専門家とにこやかに対話しよう

3) 仮説からの逸脱を発見したら～提言作成のテクニック

- ・ 現地側に期待した投入が不可能であるとわかった
- ・ 想定していた条件が存在しないことが事実が発見された時
- ・ 想定した活動が非現実的であるとわかった時
- ・ プロジェクト想定時に知られていなかった事実が発見された時
- ・ プロジェクトに対する不満が明らかになった時
- ・ 現地側の説明が虚偽であることがわかった時
- ・ ドナーと人々の認識のズレが明らかになった時
- ・ 「真実」が複数出てきた時

4) 問題を整理して提示する～業務指示書を逸脱しても～

例1 ホンジュラス女性起業支援プロジェクト

例2 バヌアツ太陽光発電プロジェクト

例3 フィリピン母子保健・薬剤回転資金プロジェクト

5) 調査が終わったら

出張中に現地でセミナーをしよう

あちらこちらで言いふらそう

痕跡を残そう